心の推測に及ぼす固有情報への注目の影響

○瀧澤純・山下利之

(首都大学東京 人文科学研究科)

キーワード: 視点取得, 処理資源, 固有情報

The effect on mental reasoning by focusing on privileged information

Jun TAKIZAWA, Toshiyuki YAMASHITA

(Graduate School of Humanities, TMU.)

Key words: perspective-taking, processing resource, privileged information

目 的

他者とコミュニケーションするためには、自分が知っている情報を、他者と共有している情報(共有情報)と他者と共有していない情報(固有情報)に精査することが必要になる。ただし、精査するプロセスは必ず働くわけではなく、共有していない情報を用いたコミュニケーションが行われ、誤解の原因になることがあるとの指摘がある(Nickerson, 1999)。

瀧澤・山下(2009)は、人の処理資源が不十分な場合に、精査のプロセスが妨害され、推測の対象者(以下: ターゲット)の心を推測する際に、ターゲットと共有していない情報をより多く使用することを示した。さらに、予め固有情報に注目した場合には、この効果がみられないことを示した。本稿では、固有情報への注目が、処理資源を用いて考慮する対象を変化させた可能性について検討する。3つの可能性“1. ターゲットについての考慮の増加, 2. ターゲット以外についての考慮の減少, 3. 1と2の両方”について明らかにするために、自覚できるレベルでの考慮を参加者に報告させる。

方 法

参加者 大学生 60 名 (男性 40 名, 女性 20 名) が参加した。

材料 質問紙に、登場人物がメールをしている物語を読む課題(Fig. 1)を2つ配置した。課題の目的は、メールの受信者が送信者の本心をどのように解釈するのかを推測することであった。つまり、課題におけるターゲットはメールの受信者であった。物語の文中に、参加者は知られるがメール受信者は知らない情報(固有情報)を挿入した。この課題にお

久美子と美穂は、ある同じ会社に勤めている。久美子は、3日後のプレゼンのために、なるべく早めに書類の作成と印刷などを済ませておきたかった。そこで同僚の美穂に今日中にできるだけその仕事を進めておくように頼んだ。美穂は「まかせてください。完璧にやっておきますよ!」と言った。結局、書類は完成できたが印刷まではできなかったのも、美穂は申し訳なく思いながら帰宅した。

久美子は準備されたものを見て、美穂が思ったより協力してくれなかったと思い、怒りを感じた。そして、久美子は美穂に次のようにメールした。
「たくさんお願いしすぎたかなと思ったけど、これだけであればまあまあ上出来ね。」

- あなたは、久美子の本心について、どの程度下線部の言葉のとおりだと思いますか。
- プレゼンの準備について久美子はどう思っているかを知らない美穂は、久美子の本心について、どの程度下線部の言葉のとおりだと感じると思いますか。

Fig. 1 物語と質問の例

ける固有情報は送信者の本心であった(Fig. 1 斜字部)。

固有情報に関して尋ねる固有情報注目質問の有無によって、固有情報への注目を操作した。固有情報注目質問あり条件の参加者は、Fig. 1 の 1) のような質問に回答した後、Fig. 1 の 2) のような受信者の解釈を推測する質問に回答した。固有情報注目質問なし条件の参加者は、受信者の解釈を推測する質問のみに回答した。

従属変数として用いるために、全ての物語に回答した後、受信者の解釈を推測した際の考慮を尋ねる質問に回答させた。ターゲットについて考慮したかどうかを質問 A “メール受信者についての質問に答えるとき、メール受信者の状況を考慮するようにしましたか。”によって尋ね、ターゲット以外を考慮したかどうかを質問 B “メール受信者についての質問に答えるとき、メール送信者の状況を考慮するようにしましたか。”によって尋ね、“はい”か“いいえ”から選択して回答するように質問紙に配置した。

手続き 参加者全員に対して同時に、個別記入式の質問紙実験を実施した。物語を読む直前に、15 秒間で数列を記憶した。参加者により異なる2種類の数列を用意することによって、認知負荷を操作した。認知負荷低条件の参加者は2桁、認知負荷高条件の参加者は8桁の数列を記憶した。

結 果

質問 A の回答×認知負荷×固有情報注目質問の有無についてクロス集計表を作成し、認知負荷の条件ごとに Fisher の直接確率計算を行った。質問 B についても同様に行った。質問の回答が固有情報注目質問の有無によって異なっていたのは、質問 B の認知負荷高条件のみであった。固有情報注目質問がない場合と比べて、固有情報注目質問がある場合に、送信者の状況を考慮しなかったという回答が多かった(Tab. 1)。

Tab. 1 質問 B の回答

固有情報注目質問	認知負荷低		認知負荷高	
	質問B		質問B	
	はい	いいえ	はい	いいえ
なし	10	6	14	0
あり	12	3	9	6
	ns		p < .05	

考 察

処理資源が不十分な状況では、固有情報への注目によって“2. ターゲット以外についての考慮の減少”が起こる。ターゲットに関連しない情報を考慮する労力が減るため、結果として、処理資源が十分ある場合と同程度に、ターゲットを考慮することが可能になったと考えられる。

引用文献

- Nickerson, R. S. (1999). *Psychological Bulletin*, 125, 737-759.
 瀧澤純・山下利之 (2009). 日本人間工学会関東支部第 39 回大会講演集, 124-125.